

分類をとばして、今も氾濫している大川の荒れ川式の河原、それと漸く土堤を築いて限ったものの、まだ河原の生のもの、それに沿う砂土の分布をみると、扇状地氾濫の様態がよくうかがわれる。

この植質土と、砂礫土との間に広く分布するのが、やや熟化した壤土と、いくらか氾濫の名残を止める、恐らく応永二十六年（一四一九）頃か、近くは天文五年（一五三六）頃までも、洪水にさらわれていたではないかと思われる砂壤土が、村の両側に幅広く横たわっている。この表土は一〇～五〇センチ程度のもので、下部はすぐ砂礫層になっているから、開拓も新しく、元和以後の新田開墾などは、専らこの地域に行なわれた。

そして中州の中央に、北会津村の主要部として横たわるのが壤土地帯で、表土はやはり薄い所では一〇センチくらい、厚い所では一五〇センチにも達する。場所によって違うが、下部に直接砂礫層の横たわる所もあるが、砂質壤土を四〇センチくらいの厚さにもつていたり、開拓が早くから行なわれた地帯である。

2、大川沖積地 この説明書によると、川南・館の内・荒井の殆ど全部が大川沖積地で、砂質の包有が最も多く、東に移るに従って植質を増すとある。これは昔の河床が上米塚の南より、北会津村を対角線に今和泉・鷺林を通して本田方面にぬけたためで、砂礫は上流山地の侵蝕物である。河流の関係上、植質の含量は勿論北部にゆくに従って加わり、下層の石礫に至る深さも増してくるわけである。

この精査では大川沖積地として神指・中四合と、金屋付近の土壤をとって化学分析も行なっている。現在の分析法と異なつてわかりにくいのが、金屋については、第四紀新層粘状壤土とし、「相当の壤土と見做すべきものなるも、性質は一種の粘状を呈するを以て、粘土質を帯ぶる土壤と称せり、その粘状は細微の砂に原因するならむ」として、次のような化学性の分析表がのつている。

一反歩含量

窒素

磷酸

加里